

漁業経済学会 短 信

「漁業経済学会第42回大会に参加して」

北海道大学大学院 栗原 修

新装なった中央水産研究所において、第42回大会が開催された。実は、私が学会の一員となってから少し年数が経っているのだが、今回初めて一般報告を行った。積極的に参加したという意味で、今大会は自分にとって記念すべき(?)ものとなるであろう。

大会初日の午前中に自分の報告を行った。しかし、準備不足と日頃の不勉強から不十分な内容に終始し、顔から火の出るような思いをした。「漁業協同組合論の現段階」と題して、漁協論のレビューと新たな分析視角の提示を試みたが、学会誌の論文やシンポジウムの概要等を一読しただけでは、とても達成できるような課題ではなかった。ただ、至らぬ内容にもかかわらず、学会期間中には多くの先生方がアドバイスや叱咤激励をして下さり、とても有り難かった。数々の御助言にも在った通り、漁協を巡る歴史の中で、その時々になどのような事が問題とされてきたのか、現代

目 次

1, 第42回学会大会に参加して……	1
2, シンポ報告印象記……………	3
3, 会員動向……………	6
4, 大会報告……………	7
5, 在京理事会報告……………	9
6, 編集委員会からのお知らせ……	9
7, 事務局からのお知らせ…………	10

は何が重要な論点であるのかを的確に把握する必要がある。そしてまた、自分自身の問題意識をさらに明瞭にした上で、この半年間の目標としてあらためて漁協論のレビューをまとめていきたい。

さて、漁業（水産）経済研究において、水産物市場あるいは流通の分野は蓄積が多く体系化が進んでいる、とはよく耳にするところである。漁業経済学会の過去のシンポジウム

でも、流通論・需給構造論・価格論などを含むテーマはかなり目にする。しかし、私自身は修士課程で工業基地開発と漁業問題に関する事例研究を行ない、現在は漁協論に取り組もうとしていることもあって、市場や流通の問題は今まであまり馴染みのない分野であった。と言うよりは、やや苦手意識を抱いてきた分野である。なぜなら、生産・加工から消費まで全てのプロセスをカバーしなければいけないし、また魚種や漁業種、あるいは地域によっても固有の差異が存在するからである。単に私の偏見や認識不足に過ぎないのであれば御批判願いたい、何よりも情報量の多さが必要とされる分野ではないかと思う。もちろん、漁協論においても共販やマーケティングの問題が論じられるが、理念的な展開や法制度的なアプローチよりは、現実にはどのような事が起こっているのかを知らなければ何もできないような気がする。

従って、今シンポジウムには、まずは多くの情報を仕入れようとして臨んだ。コーディネーターの中居裕先生によれば、水産物市場の問題が学会シンポジウムのテーマとされるのは今回が初めてだそうである。少し意外な気がしたが、調べてみると確かに「市場」自体が題名となっている年は無い。逆に言えば、それだけ広範な課題・領域を含む問題だったという事なのであろう。報告要旨集における中居先生による近年動向の整理や同じくシンポジウム当日の論点設定を見ても、大量の内容があり項目数の多さがそれを物語っている。ただし、報告自体は主要魚種毎にテーマ化さ

れたため、それぞれが全ての論点項目に当てはまっていたかという点、必ずしもそうとは言えない。

例えば、供給側の事情として国内産と輸入ものとの競合が大きな要因として扱われたもの（サバ、サケ・マス）があれば、国内主要産地間の生産動向が関連しているもの（養殖ブリ類）もあり、また量販店による川上規定は一致した捉え方であったが、その内容はさまざまであった。もとより、今シンポジウムのねらいは、現代の水産物市場の変化の諸相を明らかにしそれが漁業生産・産地にどのようなインパクトを与えているのかを解明することにあったので、ベクトルの方向、すなわち川下が川上を規定するという視点は最初から前提にあった訳である。その結果として、量販店の役割がクローズアップされたのだが、そのウェイトは各報告によって違っていたようで、量販店に関する報告項目が統一されていたら良かったと思った。

もちろん、現場の具体的な話を聴くという自分の目的からみれば、それなりに有意義なシンポジウムであった。しかし、欲を言えば、総合討論がもう少し聴き応えのあるものであったらと思う。と言うのも、時間自体が少なく、また質疑応答を通じて論点が深化したというわけでもなかった。

以上、僭越な事を書き連ねてしまったが、意見を出すからには自分自身が積極的に係わらなければいけないので、今後は学会での報告を自ら義務づけていきたいと思う。

漁業経済学会シンポジウム報告印象記

近畿大学 妻 小波

1、1995年度漁業経済学会（第42回大会）は5月26、27日の両日にわたって中央水産研究所（横浜）において開催されました。初日は20編の一般報告、二日目はシンポジウムと、大変密度の濃いスケジュールであったが、本稿は学会事務局より与えられた課題にお応えして、二日目に開かれたシンポジウムについて若干の感想を述べてみたいと思います。

本年度の学会シンポジウムテーマは「水産物市場の変貌と産地対応」となっています。70年代後半から順調に伸びつづけてきた水産物市場はバブルの崩壊によって頭打ち傾向となり、かつて破竹の勢いで急拡大した「活魚市場」もここにきて成熟段階を迎え、さらにアパレル業界から発生し社会的現象にもなりつつある「カテゴリー・キラー」という業態が水産物市場においても芽生え、水産物の価格形成も異なる様相を呈しはじめて、産地、消費地を問わず水産物市場は大きく変貌しています。そうしたなかで、本年度のテーマ設定はきわめて時宜を得ていることは申し上げるまでもないでしょう。

2、このテーマをめぐるのは、5人の報告者が長年の研究蓄積を背景にそれぞれの視点と、それぞれの方法論にもとづいて持論を展開されました。各報告者の切り口の鋭さとすばらしい着眼点、さらに厳密なフィールド・ワークにもとづく豊富な資料・データを前にして、筆者のみならずご来場の皆様にも知的な刺激を満喫された一日であったはずです。

第1報告では、中井裕はコーディネーターとしての立場から「水産物市場の変貌と産地条件」をテーマに本年のシンポジウムそのもの

の解題をされました。まず、水産物市場そのものを需要ないし取引の総体として規定したうえ、水産物需要市場としては生鮮市場、加工市場さらには惣菜市場などの個別市場に細分化されていることを提起し、そうした個別市場への分析を通して課題解明を試みる必要があるという基本的な分析のフレーム・ワークを提示されました。

そのうえで、①水産物市場の動向を学会としてどう理解したらいいのか、②国内漁業の衰退と輸入品増加に象徴的に表される供給条件の変化をどのように捉えたらいいのか、③中間流通段階や末端需要段階における流通変化をどのように評価するか、④小売段階での価格低下など価格条件をめぐる動向や変化が産地供給サイドや市場にどのようなインパクトを与えているか、などのシンポジウムとしての論点整理ないし問題提起されました。そして、シンポジウムでは、主力商材とされるマグロ、サケ、ブリ、サバの4魚種を取り上げて、「1980年代以降今日までのそれら商材の需要・流通・供給（生産）・価格等を整理考察することで、現代の水産物市場の変化の諸相を明らかにするとともに、それが漁業生産・産地に如何なるインパクトを促しているのか」について検討することによって、本シンポジウムの課題にアプローチしようとするものであると説明されました。

この解題を受けて、以下第2報告では「サバ需給構造の変化と産地対応」（多屋勝雄）を、第3報告では「サケ・マス需給構造の変化と産地対応」（佐野雅昭）を、第4報告では「養殖ブリ類の市場構造と産地再編」（長

谷川健二)を、第5報告では「マグロの需給構造の変化と生産構造の展望」(廣吉勝治)を、それぞれテーマにして、各報告者の長年の研究成果が披瀝されました。それぞれの報告の興味あるポイントを要約すると次のようになります。

多屋報告ではイノベーションが進展した結果青物市場が拡大しているにもかかわらず、生鮮サバの需要が大きく減退し、生鮮サバの家庭消費における価格弾力性が低下していること、そしてサバの消費形態が多様化していることなどが指摘されて大変興味深かった。佐野報告ではサケ・マス市場が消費の大衆化・周年化などによって順調に拡大しつづけているなかで、80年代に入ってから北洋サケ・マス漁業は供給先としての意味を失い、かわって輸入ベニとアキサケが供給の主役として躍り出たものの、供給過剰と消費ニーズの変化などによって国内産地が生き残りをかけて独自の製品技術開発や市場開発、経営努力が求められている実態をつぶさに明らかにされました。長谷川報告では養殖ブリの市場の特質を三つの段階に分けて点検したうえで、養殖ブリをめぐる市場流通および市場外流通の特性ならびに担い手の行動実態を明らかにし、産地間における生産・出荷競争の実態と問題点を明らかにされました。最後に廣吉報告ではマグロ市場は、技術発達や消費者ニーズの変化等によって、国内消費市場のすそ野の拡大(農村部での消費拡大)や国外市場(韓国市場)の台頭などを内容として拡大してきている事実を明らかにされたうえで、これまでに商社主導によって展開されてきたマグロ市場における生産者サイドでの対応方向などについて言及し、マグロ産業の今後につ

いて問題提起されました。これまでに、単一魚種の市場などに関する問題関心の薄かった筆者にとっては、これらの報告は大変刺激的で興味深いものでありました。

3、以上の5報告に対して、午後からは5人のコメンテーターによるコメントとフロアとの質疑応答が行われ、白熱した議論が展開されました。コメンテーターや多くの質問者の問題把握の鋭さはさることながら、回答者の応答も当意即妙で、まさにシンポジウムの醍醐味を十分に味わえました。ただ、正直なところ自分自身の無学で若干消化不良が起きたのも事実で、頭は未だにすっきりしておらず、勉強不足を痛感いたしておるところです。そういうことを自覚のうえ、本年度のシンポについて若干の感想を述べさせていただきますが、筆者の理解不足によって誤解や間違いなどがあればお許しを頂きたいと思います。

まず第1に、シンポジウムの課題達成のために、マグロ、サケ、ブリ、サバの4種類の魚種を選定したわけですが、その選定理由・選定基準は如何なるものか。つまり、この4種類を年間消費量の順から選定したのか、それとも消費財としての性格から選んでいるのか、さらには水産物市場変貌の特徴的な一側面をそれぞれもっているからなのか、そうした基準が定かではないように思われます。

もちろん、コーディネーターからは「深く議論をしない」と前置きした上で、「主力商材である」からとの説明がなされていました。たが、もしそうだとすれば、「御三家」といわれ、80年代を通じて水産物市場をもっともダイナミックに変えていたエビ商材を抜きにして語ることにはできないのではないのでしょうか。もっとも、エビ市場をめぐるのは輸入物

が主役を演じているので、それがシンポジウム・テーマの一翼を担う（国内）産地対応との関わりが、養殖クルマエビなどのごく一部の品種を除けば、やや薄くなることも事実です。ところが、もし国内産地を念頭に置くのであれば、輸入物との直接競合を演じているサバやサケだけでなく、輸入物とはある程度差別化されてはいるものの、その影響を常に受けているヒラメなどのいわゆる「高級品」としての沿岸物についても取り上げる必要があるのではないのでしょうか。こうした沿岸物の市場問題は従来水産物市場問題の中心的な課題の一つであったはずですが。

筆者としては、個人的な興味からこうした輸入物の代表的な品目であるエビや高級品としての沿岸物についてご報告頂ければありがたかったのですが、限られた研究蓄積と制約されたシンポジウムの時間のなかで、そのすべてを対象とすることはとうてい無理なお願いなのかもしれません。

第2に、第1報告で提起された本シンポジウムの基本的な分析枠組みが、それぞれの報告のなかでは十分に徹底されてはいないように思われます。つまり、第1報告では「水産物市場＝需要または取引の総体」との認識のもとで、水産物市場を生鮮市場および加工市場・惣菜市場などの細分化されたサブ市場から構成されることを説き、きわめてクリアな枠組みを提起されわけです。この基本的枠組みに立脚すれば、本シンポジウムの目的は十分に達成されることはいうまでもないわけですが、しかし報告によってはかならずしもそうした枠組みを採用してはいないように見受けられ、また市場そのものの捉え方も若干の違いをみせているように思われます。午後の

議論のなかであった「論点の統一がいまひとつはっきりしない」とのご指摘もここからきているのではないのでしょうか。もっとも、完璧に統一された枠組みで議論されるシンポジウムからかならずしも新しい刺激と新鮮な発想を受けられるとは限りませんし、自由な議論がかえってすばらしいアイデアをもたらす場合も多々あるはだと思えます。

第3に、各報告は需要構造あるいは需要特性の変化から課題にアプローチする手法をとっているが、欲をいえば、そうした需要になうそれぞれの経済主体の市場行動や行動基準、さらには経済主体間どうしの競争関係や取引関係までにも言及して頂ければ有り難かったと思います。もっとも、複数の報告ではそうした事実関係についても若干言及され分析されていまして、大変有益なご教示を頂いたことを否定するものではありません。

第4に、水産物市場問題といえば、かつては畜産物との消費代替が主要な問題関心の一つであり、また今日では輸入品との代替関係は常に生じているはずであるにもかかわらず、今回の議論ではそうした代替性問題を真正面から取り上げてはいないように思われます。もっとも、この問題に関する本格的な研究は少なく学会としての蓄積は必ずしも多いとはいえない状況のなかで、それを正面から取り上げること自体やや難があったのかもしれませんが。

第5に、シンポジウムを通じて、それぞれの単品市場の変貌の実態およびそれに応じた産地・生産者サイドの市場対応の動きはクリアに描き出されたわけですが、しかしそれがひとつのジャンルとしての水産物市場全体の変貌にどう反映されているのか、いまひとつ

はっきりしないような気がいたします。そして、欲をいえば、現段階における水産物市場は日本経済全体のなかで如何なる特質をもち、それが農産物市場や畜産物市場などの他の生鮮食料品市場の変貌過程とはどのような違いをみせているのかなどについても議論のなかで取り上げてほしかったのです。

4、ともあれ、これまでに水産物の品目毎の市場問題に疎かった筆者にとっては、今回のシンポジウム・テーマは大変刺激に満ち、示唆に富んだものでありました。コーディネーター、報告者ならびにコメンテーターの多大

な努力の結果であり、感謝申し上げます。また、個人報告を含めて素晴らしい学会運営をなされました事務局や中央水産研究所の現地事務局の皆様にもお礼申し上げます。

最後に、私事で大変恐縮でございますが、今回の学会で拙者のようなものがはからずも1994年度漁業経済学会賞を受賞いたしまして、大変身に余る光栄に浴しましたが、この紙面をお借りいたしまして、お世話になりました会員の皆様に深謝の意を申しあげたく思います。

《 会員動向 》

内藤 一郎

三重大学を去って3年余になります。

大阪海区の漁業調整委員の仕事は、思いがけぬ晩学の機会になりました。ここでは漁業者の生々しい声が聞かれます。

最近の例では、関西国際空港の周辺海域を遊漁を含めて漁業禁止にしたのも、1m以上の大型かご漁業を禁止したのもこの委員会によるものですが、そう簡単に決まったわけではありません。

各組合員の中でも、この委員会の中でも激しい討議がありました。もちろんその背景には、各漁業間の利害関係がありますが、関空第2期工事はじめ埋め立て等様々な「開発」計画の影響は無視できません。

私は農林省、水研、大学を通じて、現地の漁業関係の方とよく付き合ったほうで、むしろそれが唯一のとりえだったかと思いますが、今になってその未熟さを痛感することになりました。大学中であつたら、たぶん講義内容も少しは違っていたでしょう。

なお、この委員会の関係で、大阪の漁業史に関わっています。大島先生はじめ碩学の皆さんの前に忸怩たるものがありますが、内心よい勉強の機会だと思っています。

鳥羽の海の博物館との関係は大学のころからのことですが、特に退職後、40年間にたまってしまった漁業関係の私的な資料を引き取ってもらった縁で、評議員をしています。

そのため、私人の力でこれだけの博物館活動をしていくのが、いかに大変なことかということがよく分かってきました。この頃はスペイン村開設と関西大地震で、入場者が減少し大打撃です。(未だの方一見の価値あり、鳥羽よりパール道路で浦村の次)

それにもかかわらずS O S (SAVE OUR SEA) 活動は依然活発で、恒例のサマースクールも開かれるし、伊勢湾関係の資料の収集も一段と努めています。こうした事業や運動に、もっと公的な援助があつてよいと思います。

そのほか、いくつかの委員会やN G Oに加

わっていますが、特に環境基本法やアセスメント論に関して、立場や考え方の違う人たちのつき合い、議論は、たまには不愉快なこともあります。とにかく刺激を受けます。

しかしそれにもまして刺激的なのは、俳句会の先生や仲間とのつき合いです。俳句は作家と鑑賞家、批評家とが同一人です。これは小説や絵画などと比較すれば分かりますが、芸術(?)としては珍しい。だから句作もさることながら、お互いの選句、批評、反論が

なんとも面白いのです。

その点、我が学会とは似ているようで、その訓練のお陰もあり、句の内容はさっぱりですが、句会の席では始めて3年目にしては、気楽な気分で楽しんでいます。しかし、本当はみんなに楽しまれるための肴なのでは……

鰯 鮎 颯 爽 と し て
悲 し け れ

第4 1 回漁業経済学会大会報告

5月26日(金)～27日(土)の両日、横浜市の中央水産研究所において第41回漁業経済学会が開催された。中央水研所属会員の協力により大会は円滑に運営され、両日とも多数の参加を得て活発な討議がなされた。大会プログラムは以下のとおりです。

〈一般報告〉

1-1. 明治前期における乱獲への対応の研究－サケとアワビを例として－

東水大院 中野・水口

1-2. 琵琶湖アユ漁業の漁期内における漁獲量の最適配分

東水大院 鈴木直樹

1-3. 北海道渡島支庁におけるホタテガイ養殖業の経営管理に関する一考察

東水大研究生 本多 剛

1-4. 漁業者間の資源利用におけるニッチの存在について

(財)政治経済研究所 山口由二

1-5. 「物質代謝論的環境経済学」にみる伝統的漁業管理の捉え方

三重大学 佐久間美明

1-6. アイスランド漁業管理制度における小型

漁船漁業管理：TAC資源管理と地域雇用政策考察

中央水研 黒沼吉弘

1-7. 漁業管理における集団の大きさと合意形成過程に関する予備的研究－福島県のヒラメの漁業管理を例に－

中央水研 中西 孝

2-1. 霞ヶ浦の漁場環境の変化と沖ノ内地区曳網漁家の就業構造との関係

東水大院 工藤貴史

2-2. 輪島における漁家の女性就業－漁業生産と行商－

東水大院 三木奈都子

2-3. 輸入水産食品の衛生検査制度

鹿児島大院(連合) 富田耕治

2-4. 韓国における日本養殖マダイの輸入性格と流通動向

釜山水産大学校 張瑛秀・朴泳炳

2-5. 漁業協同組合論の現段階

北大大学院 栗原 修

2-6. 漁村と原発－三重県南島町漁民33年の闘い－

東水大 水口憲哉

2-7. 漁協の生産性分析ー農協との比較ー

農中金総研 大塚秀雄

2-8. 大型イカ釣漁業の存立条件ー八戸地区の 大型イカ釣漁業の生き残り競争からー

中央水研 三木克弘

2-9. ホタテガイの「過剰生産」の現状と展望

北海道大 古林英一

2-10. 冷凍カツオ需給の現状ーB1カツオを中 心としてー

東水大 馬場 治

2-11. ノリの商品的性格と生産諸条件の変化

全漁連 赤井雄次

2-12. 外食産業における水産物需要と調達行動 ーファミリーレストランの水産物調達を 中心としてー

央水研 田坂行男

2-13. スーパーマーケットと水産物流通

流通総研 金田正裕

〈シンポジウム〉

テーマ:水産物市場の変貌と産地条件

1. 水産物市場の変貌と産地条件

下関市立大 中居 裕

2. サバ需給構造の変化と産地対応

中央水研 多屋勝雄

3. サケ・マス需給構造の変化と産地対応

東水大 佐野雅昭

4. 養殖ブリ類の市場構造と産地編成

三重大学 長谷川健二

5. マグロの需給構造の変化と生産構造の展望

東水大 廣吉勝治

※コメンター:片岡千賀之(長大)・田坂行男(中央水研)・島秀典(鹿大)・山尾政博(鹿大)

※司会:浦城晋一(鈴鹿医療科学技術大)
古林英一(北大)

〈総会議事〉

議長に境一郎氏を選出し、秋谷重男代表理事の挨拶の後、下記の議事について審議した。

1. 1994年度事業報告(渉外関係、組織関係、学会誌編集関係、短信関係等)

2. 1994年度会計決算報告、監査報告(資料1参照)

3. 1995年度事業計画案

学会誌編集計画(年4回発行)、短信編集計画等が審議、了承された。また、次回第43回大会予定地は鹿児島(現地事務局・鹿児島大)となった。シンポテーマについては在京理事会に一任ということでした承された。

4. 1995年度予算案(資料2参照)

恒例のボーナスカンパ(年末カンパ)については、導入当初と現在は状況が様変わりしているとの意見が出され、今年度からは廃止することとなった。

5. 学会賞選考委員会報告及び学会賞受賞

・学会賞 婁 小波(近畿大学)

対象業績『水産物産地流通の経済学』

(学陽書房、1994年)

・学会奨励賞 張 瑛秀(釜山水産大学校)

対象業績「産地再編成と産地加工経営の変化に関連する一連の研究」

「韓・日水産物貿易の構造変化輸出関連資本の動向」『漁業経済研究』38巻1号

「産地加工経営の構造再編の動向と特徴」同、39巻1号

6. 新役員(95.5~97.5期)の選出

(50音順、敬称略)

代表理事;浦城晋一

理事;

秋谷重男、○伊藤康宏、池田均、浦城晋一、

○榎彰徳、大海原宏、大島譲二、大崎晃、小野征一郎、柿本典昭、加瀬和俊、○片岡千賀之、○亀田和彦、倉田亨、○黒沼吉弘、○佐久間美明、○佐野雅昭、志村賢男、鈴木旭、○島秀典、高山隆三、○田坂行男、○多屋勝雄、中居裕、中楯興、○長谷川健二、○濱田英嗣、○服部昭、○馬場治、○古林英一、廣吉勝治、堀口健治、○増井好男、松田恵明、○三輪千年、○三木克弘、○宮澤晴彦、八木

庸夫、○山尾政博、○若林良和（○は常任理事）

監事；赤井雄次、米田一二三

7. 学会賞選考委員の選出

委員留任（96.5月まで）の片岡、倉田両氏を除き、大海原、小野、廣吉、堀口の4氏を改選し、加瀬、浦城、多屋、高山の各氏を選出した。浦城氏が代表理事に選出されたため、鈴木旭氏が補充・選出された。

在京理事会報告

1. 学会誌編集計画（後述「お知らせ参照」）

2. 短信

通常通り、年3回発行を予定している。

3. 次期シンポジウムについて

鹿児島大学（案）をもとに活発な議論が行われたが、なお検討すべき事項があり、テーマ及びテーマへの接近方法、報告者の依頼等

具体的な作業には至らなかった。次期在京理事会で最終決定にこぎつけるべく、代表理事、事務局を軸に調整することとなった。

4. その他

日本農学賞の推薦候補締め切りが11月上旬となっています。該当者が居られれば、自薦・他薦含め事務局までご連絡下さい。

学会誌編集委員会からのお知らせ

1. 学会誌発行予定等

40巻1号（一般投稿号）は既に編集作業を終了しております。会員の皆様のお手元にも、既に配布されているものと思います。なお、6月末の発送に間に合わず、ご心配、ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

40巻2号（大会特集号）は現在編集作業中です。9月末には会員の皆様へお届けできるよう、作業を進めております。

40巻3号（一般投稿号）は12月末の発行を予定しておりますので、学会誌への積極的、かつ早めの投稿を宜しくお願い致します。

2. 学会誌編集上の申し合わせ事項

今年度の総会で次のような申し合わせ事項

が確認されましたのでお知らせします。会員各位には この申し合わせ事項をご確認の上、対応下さるようお願い申し上げます。

① 英文抄録・タイトル等について

1) 外国の読者にもわかりやすいように、英文の改善を図る。

2) そのために英文の提出は編集委員会の通知した期日までに行うものとする。従来通り原稿提出時に英文は不要だが、掲載決定後通知した期日までには提出をお願いしたい。

3) 英文抄録は論文のみ必須。研究ノート、実態調査、分析視角については義務づけないが、英文抄録掲載を希望する場合は受け付ける。これら以外は英文抄録を掲載しない。なお、英文タイトル・氏名・所属は全ての論稿

に必須。

② 投稿原稿のフロッピーディスクでの提出について

従来原稿は3部(コピー可)提出することになっていたが、それに加えて可能な限りフロッピーディスクの添付をお願いしたい。その際、パソコンワープロソフトの種類は問わないが、テキストファイル形式で提出すること。

3、学会誌英文名称の変更について

今年度の総会では、英語の学会誌名について、日本で発行されている漁業経済誌であることを明示するため、次のように変更することが決定されました。

現行; Journal of Fisheries Economy

新誌名; Japanese Journal of Fisheries Economics

事務局からのお知らせ

◆水産学研連シンポ等

・水産学部の組織改革について(教育・研究部会)

・シンポジウム「水産業に関するいくつかの疑問」(東京水産大学、95年12月上旬)

①漁業は世界の食糧問題にどれだけ寄与できるか、②海は漁業者のものか、③資源管理はできるか、④養殖魚は安全か、⑤水産物は健康によいか、⑥漁業は環境にやさしいか

◆文献寄贈

・小沼勇『漁村再訪の旅』創造書房 93.9月発行(寄贈者著者)

・Taiwan Fisheries Research Institute
『Aquaculture in Asia』『水産研究』他

(")

・熊本一規『持続的発展と生命系』学陽書房
95.1月発行(")

・(財)食品産業センター『平成5年食品産業
短期経済観測システム開発研究調査事業報告書』平成6年3月(")

・(財)漁船海難遺児育英会『漁船海難遺族の
暮らしとその環境』平成6年6月(")

・神戸商科大学大学院研究会『星陵台論集』
第27巻1~3号 平成6年6~7年2月
(")

・奈良尾町監修・八木庸夫編著『奈良尾水産
加工史』昭和堂印刷、94.9月(八木氏寄贈)

学会短信 No. 76

1995. 8

学会事務局

〒108 東京都港区港南4-5-7

東京水産大学内

TEL 03(5463)0572、FAX 03(5463)0493

〔資料 1〕

【1994年度決算報告(1994.4～1995.3)】

1. 収入の部

大科目	小科目	予 算	決 算	決算－予算
会 費	(小計)	1,650,000	1,559,000	-91,000
	一般会員		1,465,000	
	学生会員		44,000	
	賛助会員		50,000	
会 誌 売 上	(小計)	350,000	359,100	9,100
	事務センター扱		290,100	
	事務局扱		69,000	
カ ン パ		200,000	281,000	81,000
寄 付 金		450,000	450,000	0
大 会 収 入	(小計)	270,000	195,900	-74,100
	参加費		188,000	
	書籍売上		7,900	
刊行助成金		0	0	0
雑 収 入	(小計)	20,000	11,633	-8,367
	利息		1,633	
	その他		10,000	
当期収入合計		2,940,000	2,856,633	-83,367
前期繰越金		1,831,187	1,831,187	0
収 入 合 計		4,771,187	4,687,820	-83,367

2. 支出の部

大科目	小科目	予 算	決 算	予算－決算
会誌等印刷費	(小計)	2,500,000	1,882,427	617,573
	学会誌		1,715,052	
	短信		167,375	
通信発送費		200,000	214,156	-14,156
事 務 局 費		50,000	31,912	18,088
会 議 費	(小計)	250,000	221,050	28,950
	理事会		75,000	
	ツボ*(会議)		0	
	ツボ*(旅費)		79,300	
	編集委員会		66,750	
大 会 経 費	(小計)	300,000	265,167	34,833
	教室使用料		0	
	要旨集印刷費		107,841	
	アルバイト代		105,000	
	その他		52,326	
負 担 金		43,000	43,500	-500
雑 費		10,000	0	10,000
当期支出合計		3,353,000	2,658,212	694,788
繰 越 金		1,418,187	2,029,608	-611,421
支 出 合 計		4,771,187	4,687,820	83,367

3. 財産目録(一般会計)

種 類	預 入 先	金 額
郵便貯金		10,160
普通預金	三菱(品川駅前)	1,462,996
振替貯金		469,020
現金	手持ち	87,432
合 計		2,029,608

4. 財産目録(特別会計)

種 類	金 額
定額貯金	300,000
	250,000
	100,000
	100,000
合 計	750,000

〔資料 2〕

【1995年度予算(1995.4～1996.3)】

1. 収入の部

科目	1995年度	1994年度	増減
会費	1,650,000	1,650,000	0
会誌売上	350,000	350,000	0
大会収入	200,000	270,000	-70,000
刊行助成金	0	0	0
寄付金	450,000	450,000	0
雑収入	20,000	20,000	0
カンパ	0	200,000	-200,000
小計	2,670,000	2,940,000	-270,000
前期繰越金	2,029,608	1,831,187	198,421
合計	4,699,608	4,771,187	-71,579

増減＝予算額－前年度予算額

1995年度からはカンパ要請を行わないことにした

2. 支出の部

科目	1995年度	1994年度	増減
会誌等印刷費	2,500,000	2,500,000	0
通信発送費	220,000	200,000	20,000
事務局費	50,000	50,000	0
会議費	250,000	250,000	0
大会経費	300,000	300,000	0
負担金	43,500	43,000	500
雑費	10,000	10,000	0
50周年大会 準備繰入金	300,000	0	300,000
小計	3,673,500	3,353,000	320,500
繰越金	1,026,108	1,418,187	-392,079
合計	4,699,608	4,771,187	-71,579

増減＝予算額－前年度予算額